

Book Review



デンタルバイオフィルム 恐怖のキラ軍団とのバトル

奥田克爾 著

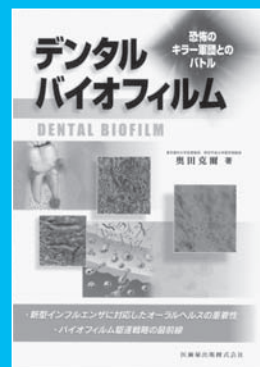


Reviewer

熊谷 崇

(山形県・(医) 日吉歯科診療所)

A4 判, 260 頁
定価 7,350 円
(本体 7,000 円+税 5%)
医歯薬出版刊



奥田先生が最初に著した『デンタルプラーク細菌の世界』を読んで以来、先生の著書はいつもすぐ手の届くところに置いてある。それは、歯科医療者が臨床を行うにあたっての必読書ではないかと考えているからである。今回上梓された『デンタルバイオフィルム』も私の本棚にその位置を占めることであろう。

私たちが日常臨床で遭遇する歯科疾患の大半は、齲蝕か歯周病に由来している。齲蝕や歯周病は口腔内細菌が原因で生じる疾患であることは、歯科医療に携わっているものであれば誰もが知っていることではあるが、臨床においてはそうした細菌のコントロールを軽視したまま、修復・補綴処置が優先されることもまれではない。しかし、原因除去を怠った修復・補綴処置は確実に歯の喪失へとつながる。

そのような観点で臨床を考えると、私たち歯科医療者が行うべき基本的な対応は口腔内細菌のコントロールにつきると言え、臨床を行ううえで口腔内細菌についての正しい知識は必須である。また、奥田先生の著書タイトルの変化からもわかるように、以前は単な

る細菌の集合体（デンタルプラーク）と考えられていた口腔内細菌叢が、現在の科学ではデンタルバイオフィルムという特異な細菌集団に変容することがわかっており、個々の細菌がもつ性質以上に複雑で厄介な存在として口腔内に存在する。特に、デンタルバイオフィルムが抗菌剤などに強い抵抗性をもつことが明らかとなり、日常臨床における PMTC や SRP などのメカニカルな処置の重要性がより明確となった。そして、生涯にわたる定期的なメンテナンスにより口腔内細菌やさまざまなリスクをコントロールすることが、歯科医療のベースとして存在する意義は大きいと考える。

奥田先生は、専門誌や学会などに発表される基礎研究だけでなく、臨床研究も広く検索されており、基礎研究が臨床に生かされることを強く志向した研究者の一人で、ある意味では希有な存在と言える。先生は日本で細菌学を専攻した後、スウェーデンのカロリンスカ研究所でカリオロジーを、また米国ニューヨーク大学バッファロー校の歯周病研究センターで研究生活を送られた。そのような体験から、基礎研究

が歯科臨床の発展に寄与することや、大きな意味で人々の健康増進につながることを希求されているように感じる。そして、1994 年に東京で開催された WHO 世界保健デーのテーマ「Oral Health for a Healthy Life」が先生の研究者としてのテーマでもある。

本書はそのような奥田先生の思いがバックボーンとして生きており、細菌学の専門書でありながら、読み手を拒否するような難しさは排され、しっかり知識として理解することで若い歯科医師や歯科衛生士でも指導や治療に生かすことが可能な内容となっている。また、新型インフルエンザ、アレルギーマシ、カンジダ症などへの歯科的対応についても具体的な記載があり、多くの歯科医療関係者に読んでいただきたい内容である。また、近年では口腔内疾患とさまざまな全身疾患との関連性が解明されてきており、そのような意味では、歯科関係者のみならず、医科の先生方や医療行政を行う方々にもぜひ読んでいただきたい内容である。歯科医療をさらに魅力あるものになりたいと願う、奥田先生の深淵な信念を感じる一冊である。